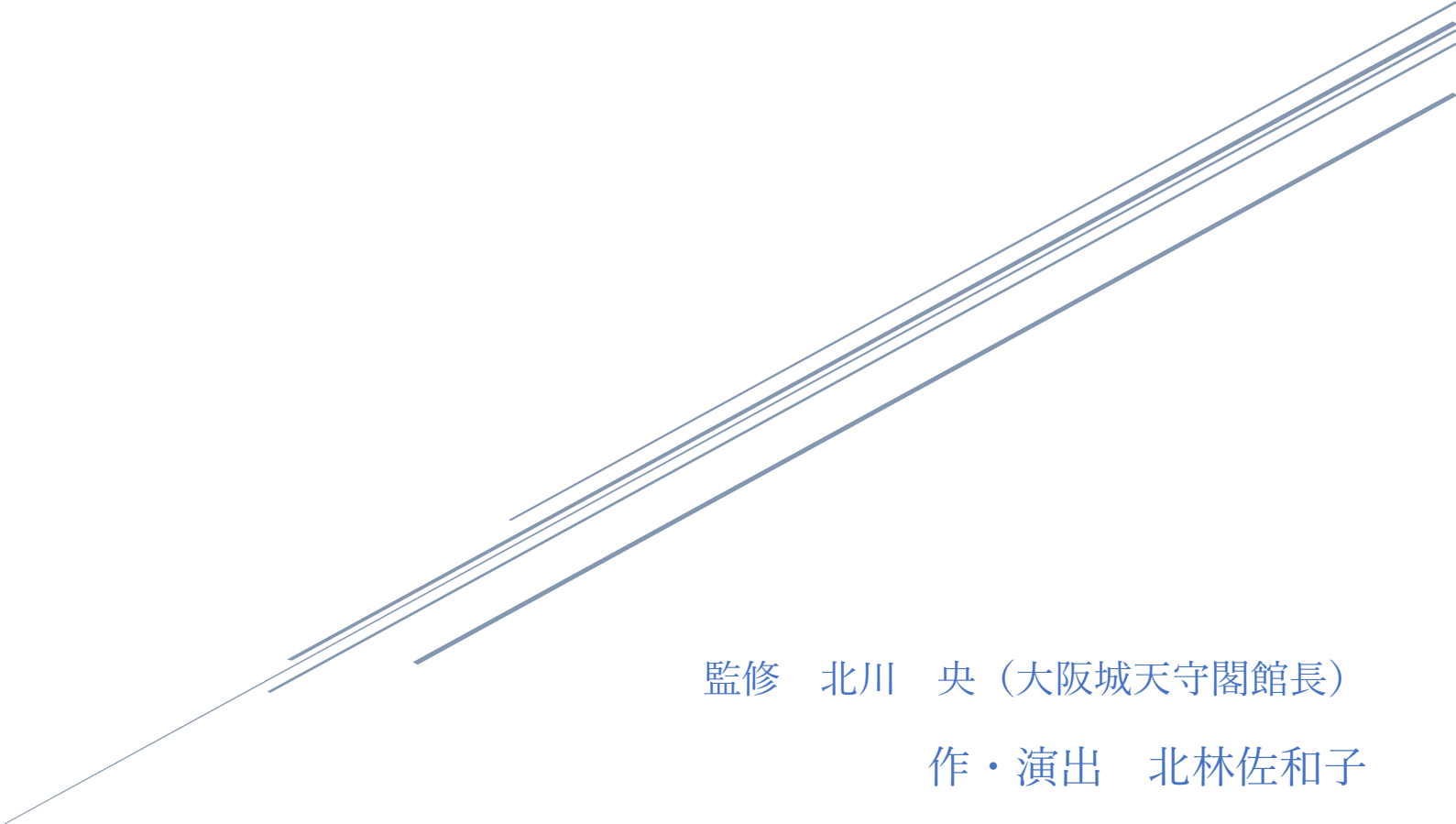


和をもって貴しとなす

歴史楽劇

第六稿



監修 北川 央（大阪城天守閣館長）

作・演出 北林佐和子

第一部 仏の耳―厩戸王

Scene 1 仏の耳

M1 夜叉の行列。

M2 ややあつて演奏。

M3 彼方より声。

♪ 宙の声 プロローグ

和のこころ 日出る国より 広めんと

生まれし光り 厩戸の皇子

現世の架け橋 この世の闇を 照らせよ

天の川 宙の果てより おまえに この声 伝えよう

この星の 進みゆく道 千四百年
のちのその名は 聖徳太子

歌後半、太子（厩戸皇子）の姿が浮かぶ。

推古十二年（604）頃。人々が太子に問いかける声が次々に聞こえる。

「太子にお尋ね申します。」

「太子は先の帝の皇子、ただいまは摂政を務める身にあらせられます。」

「摂政とは、我がヤマトを守らねばならぬお立場のはず、」

「さりながら太子は、先祖代々、帝を支えた我らをないがしろにし、新しき冠位を制定された。」

「そもそも我らの地位や称号は長年の貢献に応じて授与されたもの、」

「小野妹子おののいもこのような身分卑しき若僧より、我らが劣るというか！」

「小賢しい、十二階の冠位だと？」

「隋の国に使節を送るとか、」

「絵空事じゃ、」

「それより伽耶国かやへの対応はいかなものか。」

「我が国と伽耶えにしの縁は深い。とりわけ任那みまなは我らヤマトが支配していた。」

「その任那が新羅しらぎに奪われたのですぞ！ 討伐軍を出すのは当然、」

「しかし太子はいまだ反対を唱えておられる。」

「太子よ、」「太子、」

M4a

不安を煽るように断続的に演奏入る。

「まただんまりでございますか？」

「今また疫病が蔓延しております。」

「民は神々の罰ではないかと噂しております！」

「物部の崇たりだ…」

「おそろしい、」

「丁未ていみの年のような戦いくさが繰り返されるのでは、」

「流行り病はそのせいかな、」

「そもそも太子は仏を信奉し過ぎる。」

「物部の崇りだ…」

「待て、ご一同、そう矢継ぎ早に申されては、太子のお耳に届かぬではないか、」

「太子!」「太子!」

太子「ご心配には及びません。すべて聞こえております。」

人々のざわめき。

夜叉と呼ばれる集団が出て、太子を守る。

M4b

太子「まず。おっしゃるとおり吾は、ただいまの帝、額田部皇女様より摂政を拝命したる身。さればこそヤマトのため冠位十二階を制定いたしました。従来の制度は、豪族ごとに一族単位で帝に忠誠を誓うため、それぞれの利益ばかりが優先され豪族同士が対立、或いは連合し他の豪族を蹴落とすなど、国家全体の利益を考えるという視点がまったく欠如していました。しかし新しき制度は世襲ではなく優れた人材を見出し登用することができます。家柄にこだわることなく適材適所。これは国家の未来に関わります。また疫病は、怖れるばかりでは防ぐこと敵いません。吾は新たに施薬院、療病院を設立し、身分の上下なく病に倒れた者を隔離し、薬を与え救う所存。民を病から守らねば疫病の根を断つことはできません! 外交の方策につきましても、大きく転換すべきと考えます。海の方こうの利権を支

配する、また支配される時代は終わりました。国同士、堂々と友好関係を結び、

共通の利益、幸福を求めるのです…吾は昨年、新羅討伐の將軍に任じられた弟、

来目皇子くめのみこを失いました。各々方おのおがたのなかにも身内を亡くした方がいらっしゃるはず。

戦いくさは勝っても負けても悲惨です…丁未ていびの年の戦もそうでした。」

「厩戸皇子…」

「太子よ…」

見えない者の声を聞く太子。ややあつて退場。

Scene 2 丁未の乱

SE 戦場を表す音に

M5 ふたたび宙の声。

♪宙の声 丁未の乱

さかのぼる 十六年前 丁未の年
疫病は 猛威をふるう この災いに

「時の大連、物部守屋は、」

あるー!」

不穏な空気を宙の声が表現する。

守屋 「仏を焼き払え！ 仏を庇護する蘇我を討たねば、国が滅ぶぞ！」

守屋の戦の舞に夜叉が立ち向かう。
ややあつて蘇我馬子が登場。

その声に おおおみ そがのうまこ
大臣 蘇我馬子は

馬子 「皇子様方、物部は神々の影に隠れ、新しき帝を仕立て力を得ようとしております。物部こそヤマトの敵！」

守屋 「皆の者、よく聞け！ 蘇我は帝の皇子たちを言葉巧みに味方に引き入れ、我ら物部を謀反者にする魂胆ぞ、騙されてはならぬ！」

SE
守屋がキリキリと弓をひく姿がおぼろげに見える。
矢が飛ぶ音。

このとき 皇子のなかより 若き太子

太子登場。

馬子 「厩戸皇子！」

太子 「大臣、物部守屋の申し立てはまことか？ 大臣は物部を陥れるために戦を起こしたのか、」

馬子 「皇子はこの距離で守屋の言葉が聞こえるのです？」

太子 「聞こえる！ あの森のどこかに、」

馬子 「なにを申しているのかは存じませんが、守屋めの言い逃れでございます！」

太子 「大臣、その胸のあたり、いかがした？」

馬子 「胸の…」

太子 「黒い雲がかかっている…吾に何を隠す？」

馬子 「皇子様…」

太子 「よい、真実は仏に聞く！」

太子、天空を仰ぎ

太子 「仏の教えを守護する多聞天、増長天、広目天、持国天、四方の神よ！」

SE ふたたび矢の襲来。

馬子 「お危のうございます！ ご覧になりましたか、守屋は皇子がいらっしゃるのを

知りながら矢を射かけてくるのです！ 守屋こそ逆臣でございます！」

太子 「兵たちを守り給え。この者らは理由もわからぬまま戦のために諸国より集められたに過ぎぬ。無事、家族のもとに帰してやりたい！」

SE 異様な声。
突然の強風。

馬子 「おお、不思議や、矢が風に流されていく。」

太子 「ありがたい、風は天のご意思ぞ…」

M6a 太子が天に向かい、舞を舞い始める。

太子 「南無四天王、この戦が正義か否か吾にはわからぬ。わからぬが吾に天命あるな

ら勝利に導き給え！ この願い聞き届け給うなら、四天王の名で寺を建立し、
永く歴史に刻もう！」

家来を呼び出し、

太子 「四町先の^{まじ}的を射抜くことができるか…」

SE 鳥の羽ばたく音

太子 「見よ、今、鳥が羽ばたいた。あのちょうど三尺下ぞ。そこに守屋がいる…く
る！」

SE 矢の飛ぶ音。
太子が矢をはらう。

太子 「今ぞ！」

家来が弓をひき、守屋に命中する。

馬子 「物部守屋を倒した！ 蘇我の勝利ぞ！」

M6b 守屋が討たれた姿が見える
夜叉たちが勝利の舞を舞う。

Scene 3 四天王寺

再び推古十二年。

Σ7

先の舞は四天王寺での奉納舞になっていく。舞人は秦河勝。

♪ 宙の声 四天王寺

四天王 浄くまします 難波津の

光り集めて 朱色の柱

めぐる回廊 伽藍よ この世の闇を照らせよ

「これなるは太子夫人、」

「刀自古郎女、」

途中、太子の妻、刀自古郎女が出て歌う。

刀自古.. 志しは 孤独を覆い 民のため

まじこころ尽へず 眠れぬ夜も

歌終わり、河勝と夜叉たちが刀自古に向かい平伏し、やがて退出しようとするところ、刀自古が河勝を呼び止める。

刀自古 「秦河勝、」

河勝 「は、」

刀自古 「太子はいずこに?... 祠に、物部の祠にいらっしゃるのでしょうか... (ため息を

つき) 四天王寺が創建され、十年あまりになる。」

河勝 「おめでたきこと。」

刀自古 「この御寺は物部との戦の折、太子が四天王に勝利を祈願され建立こんりゆうされた。し

かし私は、太子は滅び去った物部を怖れておられるのだと思う。境内に物部の魂を慰める祠を設け、戦の跡地にも足しげく通われ、ついに寺を建立された。」

河勝 「太子は耳を澄ましておいでなのです。」

刀自古 「耳？ 太子のお耳の良さは小さいときからじゃ。一度に多くの者が話しかけても即座にお答えになる。幼馴染ゆえ、よう見知っておる。が、物部の一族を滅ぼした後、太子はお変わりになってしまった。快活な性格は影をひそめ、言葉少なく重く…人の心の内を、どす黒い闇さえ聞き分けるようになった…これは物部の祟りではあるまいか、そう思い立つと、居ても立つても居られず、」

河勝、首を振るが、

刀自古 「なにゆえ太子ばかりお苦しみにならねばならぬ。そなたの一族、夜叉は百済くだらより渡り、人の目には見えぬものを感知するという。河勝、どうすれば太子のお心を晴らして差し上げることが、」

88 太子登場。

太子 「刀自古、河勝を責めるでない。吾は幼き日より、この耳ゆえに苦しんできた。

小鳥の羽ばたき、花一輪散る音、やがて人の心にひそむ嘘、憎しみさえも聞こえた…それを河勝は仏の耳と褒めてくれたのだ。」

刀自古 「仏の耳…」

河勝 「太子は今、過ぎ去った時を聞き取られようとしています。」

刀自古 「過ぎ去った時…」

河勝 「たとえば物部の心、」

刀自古 「滅んだ物部の！」

太子 「あの頃は若く、吾に度量がなかった。なぜ、戦わねばならぬのかわからぬま物部を滅ぼしてしまった…今こそ過去から学び、より良い未来をつくらねばならぬ。未来は気の遠くなるような過去の積み重ね。どこかで過去を贖わねば、真実の意味で未来はない。過ちを繰り返すばかりだ…」

刀自古 「贖う…太子には罪があるとおっしゃるのですか？ 物部守屋に償^{つぐな}うと…よろしゅうございます、刀自古とともに…」

太子 「刀自古、」

刀自古 「うれしいのです、お心を明かしてくださって、」

太子 「(頷き)…山背大兄^{やましろのおおえ}はいかがした？ 吾らの息子は生まれたばかりの頃は疳^{かん}の虫が強く、身体も弱かったが、この頃は落ち着いたように見える。」

刀自古 「山背は利発な子です。大人の気配を感じとっているのでしょう…昨日、父が

訪ねてまいりまして、」

太子 「大臣が…」

刀自古 「山背の顔を見に来たと申しておりましたが、おそらく太子にお会いしたかったでしょう。しばらくお待ちして帰りました。」

太子 「冠位十二階のことであろうよ。豪族たちの反発が思うた以上に強い。先祖が築いた功績を無にされるように思うのであろう。誰もヤマトの行く末を考え
ていない、大臣さえ…吾は^{しやうと}舅の意に染まぬ娘婿だ。許せよ。」

刀自古 「私はもはや蘇我の者ではありません。あなた様の妻です。」

太子、刀自古と手を取り合うが、

太子 「今また大臣の意に染まぬことをせねばならぬ。」

河勝 「では、いよいよ憲法を、」

太子 「うむ…ただ、その始まりとなる言葉を決めかねている…」

M9 太子、刀自古、河勝の姿が消えていく。

Scene 4 推古帝

先の行進は額田部皇女（推古帝）の登場につながっていく。
お気に入り^{うねめ}の采女かめを従えている。

M10

♪ 宙の声 推古帝

かしこくも ぬかたべのひめみこ 額田部皇女

のちの世にいう 推古天皇

清く みめ 見目好く 頭よく

ほんまかどうか 知らんけど

歌の内容に反応し、

推古 「上げたり下げたり、ややこしいのう。」

かのめ 「みな、帝の威厳に感じ入ってくださっているですよ。」

推古 「そうは思えぬが、」

かのめ 「改めまして、帝にあらせられます。拍手！」

推古 「誰と喋っているのじゃ？」

かのめ 「お客様は神様でございます！」

推古 「神様か、ありがたいのう。では挨拶せねばのう。朕が、」

かのめ 「ちん、」

推古 「帝は自分のことを朕という。朕が額田部皇女、のちの世にいう推古天皇である。

(かのめに) 自己紹介なさい。」

かのめ 「はい、私は帝にお仕えする采女うねめのかのめと申します。よろしゅうお願いいたし

ます！」

推古 「采女というてもわかりにくい。もそつと説明せよ。」

かのめ「采女とは帝やお后、高貴な方々の身の回りのお世話をする女官を申します。page 011 page

采女は各地の豪族の娘のなかから選りすぐりの美女、選りすぐりの、」

推古「皆まで言うな。かのめは中臣の出であつたの。」なかとみ

かのめ「はい、中臣は代々、神様の行事、祭礼を司る家でしたが、例の蘇我の大臣と物部の戦では、中臣は物部に味方いたしまして（涙ぐむ）、負け戦の責めを負い…こうして帝に拾っていただかねば…」

推古「皆まで言うな。大臣といえば、まもなくここに出仕するようじゃの。」

かのめ「左様でございます。厩戸皇子様のことで。」うまやとのみこ

推古「また太子か、」

かのめ「はい、なんですか、憲法とやらを草案なさり、帝の御前でご提案したいのとこととで、」

推古「憲法？ いやな予感がするのう。」

かのめ「冠位十二階のように、いわゆる既得権益を失うのではないかと、力ある氏族の皆さまは心配しておられるようです。」きとくけんえき

推古「半面、帝中心の体制は強化された。痛し痒しじゃ、太子の存在は、」かゆ

かのめ「大臣もそのあたり、ご心配の様子。帝と事前に話し合っておきたいとのこと
ど。」

推古「うーん、太子なあ…あれとは因縁があつてのう…嫌い！」

かのめ「これまたストレートな、」

推古「太子も、太子の母親も好かん！」

女官が帝の椅子を持って出る。

かのめ「まずはお手元の人物相関図をご覧ください。受付でお渡しいたしました（用紙を取り出し）これですね。」

推古「それは何じゃ？」

かのめ「帝の家系図でございます。」

推古「家系図？」

かのめ「これで帝と太子の因縁を、お客様は神様にご説明するのでございます。」

推古「神様ならば周知のことではないか？」

かのめ「いや、なかなか複雑にございますし、お名前が難しゅうございますので、ご説明したほうが、」

推古「そうじゃな。身分の高い男は何人も妻をめとることができたし、母が違えば兄妹でも結婚できた。」

かのめ「左様でございます。帝の血脈を守るためでございます。」

推古「まず数字の33のところをご覧ください。『推古』とあろう、第三十三代推古天皇、

それが朕らしい。らしいと云うのは朕のような帝は今より百五十年のち、奈良

時代に漢字二文字の中国風の贈り名が与えられる。以降、朕は推古と呼ばれる

ようになる、らしい。で、朕の父親は欽明^{きんめい}天皇、母は蘇我一族の娘、堅塩^{きたし}姫。その堅塩姫には兄と妹がおった。兄は蘇我馬子というて、先ほどから大臣、大臣と呼んでいる人物じゃ。」

かのめ「大臣と書いて『おおおみ』、蘇我代々の役職でござりますな。つまり帝と大臣は姪と伯父。」

推古「左様。問題はここからじゃ、蘇我のじいさんは欽明天皇に娘二人、朕の母と妹の小姉^{おあねのきみ}君、姉妹で嫁にやったわけやね。で、我が母、堅塩姫のあいだには三十一代用明天皇と朕。」

かのめ「はい、ちん、」

推古「妹にも二人の子どもが生まれ、女の子のほうと用明天皇が結婚し太子を生んだんですわ。」

かのめ「よって帝と太子は叔母と甥、」

推古「そういうこと。」

かのめ「姉妹で一人の亭主を取り合う、複雑でございましたでしょうな。嫉妬とか、」

推古「そりゃ、もう…朕の母と太子のばあさんは犬猿の仲じゃ。そこにそれぞれ豪族が味方するから。尾ひれ羽ひれ、あっちがこう言うてるとか、ああ言うてるとか、後継者争いの火種がそこら中にくすぶつとる…」

かのめ「おそろしい。」

推古 「そこに子どもたちが誰々の夫になり嫁になりして入り乱れ、さらに火種を拡げ

る…朕がいちばん辛かったのは、朕の連れ合いが早う死んでしまい、」

かのめ 「ちんツレ、第三十代敏達天皇、」

推古 「その、びだっちゃんと朕のあいだにできた子ども…みんな死んでもた。」

かのめ 「お可哀そうに、」

推古 「次の帝は我が子の竹田皇子たけだのとの思惑がはずれ…我が娘も、太子の后きさきにしてやったのに早う死んでしまい、今では太子め、ええと、」

かのめ 「刀自古郎女様、」

推古 「そう、刀自古とのあいだに山背大兄王やましろのおえのおうが生まれ、幸せそうに暮らしとるわ…」

かのめ 「されど太子は頭がキレル。民衆の指示率高い。」

推古 「ゆえに摂政あたりに任じておかぬと、敵に回すとややこしい。」

かのめ 「何事も民を大事になさる太子のお考えをこのまま通せば、いずれ豪族はなくなり、帝も要らぬということに…」

推古 「なんと、」

かのめ 「そこまできかずとも、いずれ太子のお子、山背大兄王やましろのおえのおう様が帝を継がれる…」

推古 「叔母の血をひく者に帝は継がせぬ…亡き母の哀しみを思えば…」

M11a

推古 「太子も大臣も敵に回さず利用する方法、」

かのめ 「そんな方法が？摂政をお辞めいただくので？」

推古 「それでは太子を慕う者どもの騒ぎになる…たとえば、時をかけて太子と大臣の争いを引き起こす、そもそも太子は戦を好まぬ。宮に籠り引き下がるだろう。

時を経て太子の血筋ごと消えてくれれば好都合。朕はできるだけ長く帝として君臨する。その間に、わが腹をいためた子ではないが、びだっちゃんの孫、

田村皇子^{たむらみこ}を次の帝に…だが、このことはしばらく心に秘しておかねばならぬ。

皆には太子の子、山背に王位を継がせるかに思わせ、」

かのめ 「太子の前にニンジンをぶらさげる、厩戸だけに…」

推古 「ここまで明かしたからには、おまえもこの企てから逃^{のが}れられぬ。」

かのめ 「お任せください！ その代わりといっでは何でございますが、中臣の家からお取立てを。」

推古 「皆まで言うな、」

推古とかのめ、ほくそ笑む。
女官が出て、

女官 「蘇我の大臣がお越しになりました。」

馬子登場。

馬子 「帝、ご機嫌うるわしゅう、」

推古 「上機嫌でございます。」

馬子 「それはそれは、よろしゅうございます。」

推古 「折り入って相談があります、伯父上、」

馬子 「これはまた、どういう風の吹き回しか、」

推古 「太子のことで、」

馬子 「太子、」

推古、馬子、かのめ、笑いながら退場。

SE
遠雷

M11b

亡霊となった守屋が忍び寄る。

Scene5 上宮

前景より、守屋の影が踊るとき、太子が出る。

太子 「何者…」

守屋 「過ぎ去りし者、」

太子 「守屋か！」

守屋 「おまえは過去を贖うと言う。」

太子 「吾は何も恐れぬ。より良き未来を拓くためならば。」

守屋 「ならば、その耳で聞け。まもなくおまえは憲法とやらを発布する。理想を飾り

立てた文言もんごんを並べ、

「十七条の憲法。」

「やがて遣隋使を派遣。」

「斑鳩の地に宮を造宮。」

「隋の国より使いの者がヤマトへ、」

「隋が高句麗に攻め入る。」

「しかし隋は滅びる。」

「太子、」「太子、」

太子 「未来が、聞こえる、」

M12

↺a-ga-na-u

守屋 「さらに聞く勇氣はあるか。」

太子 「望むところ！」

守屋 「おまえが死んだあと、次の帝をめぐり争いが起こる。」

太子 「争いが起こる。」

「おまえの息子は殺される。」

太子 「息子が殺される？」

「一族みな、殺される…」

太子 「まやかしを言うでない！」

過去を贖う

贖うことは失うこと

太子 「息子は誰に殺されるというのだ！」

「蘇我の末裔、糸ひく^{まつえい}中臣、黒幕は帝…」

守屋 「お前ひとり、どう足掻こうとも、この国は何も変わらぬ。過去に学ばず過ちを繰り返す。」

過去を贖う

贖うことは失うこと

贖うことは振り返ること

太子 「我が一族をもって贖えというのか…あまりに、あまりに惨い^{むご}仕打ちではない

か！ 殺すなら吾を！ なぜ吾でなく…どうすれば変えられる？ 息子は殺さ
れずに済む！」

和をもって

太子 「和をもって？ 吾に、死んだあと我が子もすべて失う吾に、何もしてやれぬ吾

に、和をもってとは…」

選ばれし者

太子、泣きながら、

太子.. 永遠はない

限りある命 駆け抜けるだけ

永遠はない

夢を風にのせて 生まれ変わるだけ

和をもって 和をもって 和をもって

守屋の姿、消えていく。

太子 「待て、待て、守屋！ なぜ吾に未来を聞かせた…未来を変えたい、山背を救いたい、でも、どうすれば…和をもって、和をもって（狂気のように笑い）…河勝！ 河勝！」

河勝、走り出る。

河勝 「御前に！」

太子 「たった今、憲法の始まりの言葉にめぐり会^あった…帝と大臣を土舞台にお招きせよ。」

河勝 「土舞台に？」

太子 「そうだ、おまえのすすめに従い創設した我が学び舎^や、」

河勝 「異国の舞と音楽を、ヤマトの若人^{わこうど}に習得させております。」

太子 「まさしく音楽は言葉を越え、万人のこころを一つにする。そこで十七条憲法を奏上^{そうじょう}するのだ…（天を仰ぎ）神仏^{かみほとけ}よ、過去も未来もよく聞け！ 吾はこの耳

で聞いた未来を受け入れ、逃れず、この国を替えてみせる、山背の運命を替え

てみせる！ ご照覧あれ！」

太子、飛ぶように去っていく。

河勝が舞う。

M13

Scene 9 十七条憲法

桜井・土舞台。

推古帝、馬子が莊重に登場。

ややあつて、ひとときわ輝く舞人登場。舞人は太子、刀自古郎女。

太子 「帝、大臣、遠路のお運び、きようえつしごく恐悦至極に存じまする。」

推古 「太子、変わった趣向じゃのう。ほう、奥方まで。今日は憲法とやらを示してくるはずじゃが、」

太子 「はい、我が国はじめての法律、十七条憲法をご提案させていただきとう存じますが、読み上げるだけでは面白みがない。それで、この学び舎の成果、舞と音で披露させていただきます。」

馬子 「太子の新しいもの好きは今に始まったことではありませんが、この度は大仰おおおやうでございますな。」

太子 「大臣のそのお顔が青ざめるやもしれません、お楽しみに。まず十七条憲法は民を規律するためのものではありません。豪族、官僚、帝の心得を示すもの。」

♪十七条憲法

馬子 「帝の心得とは、いかに太子でも、」

太子 「まずは第一条、この言葉にめぐり会うため、血の涙を流しました。」

和を以て貴しとなす

太子 「身分上下に関わらず、」

あつさんぼう
篤く三宝を敬え

みへてのり
詔をうけて謹め

あにせよ
礼をもって本とせよ

太子 「礼節は思いやりを知ること。」

あじわい
變を絶ち欲するを棄て 明らかに訴えを

太子 「贅沢を捨て、賄賂をやめ、公明正大、民の声を聞く。権力は腐敗しやすいもの
ですから。」

いすす
悪しきを懲らし善を勧むる

よめり
人おのおの任有り

おそくま
早く来りて晏退かれよ

これ
信は是義の本なり

いひつらかり絶はす おもひつらかり棄す

太子 「これは私自身にも言い聞かせること。怒りに支配されることなく、」

功と過を明らかにし

太子 「隠れた功績、隠れた罪、」

国に二君なく民に両主無し

太子 「見逃がしてはなりません。」

諸の官

嫉妬有ること無かれ

推古 「太子はなんのことを言うておるのか、」

私を背きて公に向く

太子 「ならば申し上げます。まず大臣は、帝に力を掌握させるため、いや、おのれの立場を安泰にするため、吾を利用し、多くの者を殺した。その手は汚さずとも

物部はじめ穴穗部皇子、泊瀬部皇子、キリがない、」

馬子 「お言葉が過ぎましょうぞ！」

太子 「見て見ぬふりをした吾にも罪があります。」

古の良典なり

太子 「また帝は、好き嫌いでことを決してはなりません。」

推古 「朕は、」

太子 「たとえ吾がお嫌いでも、そのお心が多くの人を悪しき方向に導くことを重々ご承知くださいませ。この栄耀栄華は祖先が現実化したもの。帝が今、未来の

ため蓄えをなさねば、帝のお血筋は取って代わられ、或いは血脈続くとも、中臣などに操られましょう。」

馬子 「太子と言えども、許されませぬぞ！」

それ事独り断むべからず 必ず民とともに

推古 「大臣、これは余興じゃ。趣味がよいとは思えぬが…楽しめ、楽しめ。」

太子 「では剣の舞を、」

M14b

太子が剣を抜き、舞う。

あるとき、太子の剣の切っ先が馬子に向かう。

馬子 「太子！ 吾をお斬りなさるか！ 吾を殺したとて、この世には変わらぬものがある！」

太子 「殺しなどせぬ！ 殺すのは容易い、容易いが…大臣の言う通り、第二、第三の大臣が現れ、我が子の運命は変わらぬであろう…」

推古が退座しようとするところ、

太子 「（推古に）そのまま！ まもなく海の向こうに遣隋使が派遣されます。諸難ありとも、帝はこれをやり遂げねばなりません。さすれば隋より使いの者がやってきます。その際は宴を催しましょう。ヤマトが海の向こうに向かい、おおよ

けに開かれるお祝です。宴にはみな笑顔で、大臣もみな生きて出席ただかねばなりません。ここにいる者、誰ひとり欠けることなく…」

馬子 「控えよ！」

太子 「黙れ！ 吾は天より聞いた！ この言葉よりほかに運命を替えることはできぬ…和をもって、和をもって…和をもって貴しとなす。」

推古、馬子退場。

M14c

♪宙の声 中詰め

和のこころ 日出る国より 広めんと

生まれし光り 厩戸の皇子

現世の架け橋 この世の闇を 照らせよ

天の川 宙の果てより おまえに 伝えよう

この星の 進みゆく道 千四百年
のちのその名は 聖徳太子

宙の声は頂点に達し、

「和をもって貴しとなす！」

暗転。

第二部 鬼の目―山背大兄王

Scene 7 インプロダクション

俳優が、二部の登場人物と時代背景について語る。

小久保「（挨拶等あって）…さて、いよいよ第二部、開演に先立ちまして、これから登場いたします人物の説明をさせていただきます。よろしければ、お手元の人物相関図と照らし合わせながら、お聞きください。」

三名の登場人物の姿が現れる。

太子の息子で、成長した山背大兄王。蘇我馬子の孫にあたる入鹿。入鹿の友、中臣鎌足。

小久保「早速ご登場いただきましたがまず、この方が第二部の主人公、山背大兄王さんでございます。はい、第一部で厩戸皇子、聖徳太子の息子、『山背の運命を替えてみせる！』と叫んでいたその山背さんです。太子の死後、太子が心配したとおり、帝の最有力候補となりますが、自主的に身を引いた、物語はこういう状況から始まりまです。そのお隣、蘇我入鹿さんです。当時は入鹿と呼ばれていなかったという説が有力だそうですが、ここでは便宜上、入鹿で統一させていただきますと思います。入鹿さんは第一部、大臣と呼ばれていた蘇我馬子の孫にあたります。たいへんな秀才であったようですね。家柄がよい、秀才ということで、少し慢心があったのかもしれませんが、自分の思い描く未来を阻まれると思ったのか、この入鹿が西暦六四三年、山背大兄王を襲撃し、追い詰められた山背は、斑鳩宮、現在の法隆寺で一族全員とともに自害したと歴史に記録されています。この事件が発端となって、その二年後の六四五年、あの有名な大化の改新の際に、この方、中臣鎌足によって殺されるわけです。この物語では、第一部で推古天皇の横にいた、かのめさんの縁続きという設定で、この鎌足さんが山背大兄王事件でも大きな役割を果たすことになりました。」

はたして聖徳太子の『山背の運命を替えてみせる！』が一体、どうなっていくのか、三人の葛藤に注目していただきたいと思います。では、はじめましょう。」

三名の登場人物が動き出す。

Scene 8 甘樫丘

M15

建設中の蘇我入鹿邸。

異国の舞姫の踊りを、入鹿とともに、山背大兄王、中臣鎌足が見ている。
後半、入鹿が舞姫に絡み踊る。

入鹿 やましろのおおえのおう「山背大兄王、久々に舞のご披露を！」

鎌足 「ほう、山背さまは舞を、」

入鹿 はたのかわかつ「秦河勝仕込みの舞ぞ、」

山背 「ああ土舞台で、幼い日より河勝に、なぜか厳しゅう仕込まれてな(笑)」

山背、しばし舞う。

舞姫の舞は続くなか、山背が声をかける。

山背 「噂どおり、たいそう立派な屋敷だ。」

入鹿 ふしん「今は普請の最中だが、完成すれば、このまわりをぐると石垣、その門につ
ながあります。」

鎌足 「我ら悪友のあいだでは、あの門を谷の宮門みかどと呼んでおります。」

山背 「みかど？」

入鹿 「山側に父の屋敷が、あちらの門を山の宮門と呼んでいるそうな、」

山背 「あれは？」

入鹿 「武器の収納庫です。」

山背 「あの建物すべてか？」

入鹿 「何かあってからでは遅い。」

鎌足 「帝のお住まい、飛鳥宮あすかのみやに見まごうばかり、いや、それ以上…失礼いたしました、

改めまして、吾は以前、入鹿様と同じ学問堂の端はしたで学んでおりましたご縁で…

中臣鎌足と申します。」

山背 「中臣の、汝なれの家臣かと、」

鎌足 「いずれ蘇我の大臣となられる方、その上、あの太子のご子息、同席できる身分ではございませんのに、もったいなき事。」

入鹿 「相当の切れ者ぞ。」

鎌足 「滅相も、」

入鹿 「吾も山背大兄王にお越しいただけるとは、臣下の誉れ。ありがたき幸せ。」

山背 「やめてくれ(笑)…父の太子は晩年、斑鳩いかるがに宮を構え引きこもることが多くなつた。吾にもできる限り人に会わぬよう命じ、特に、蘇我の子どもたちには関わるなど、」

入鹿 「それでも若い我らは密かに示し合わせ、よく学びよく遊んだ！」

笑い、

山背 「そもそも蘇我とわれら上宮王家じょうぐわは縁が深い。父はなにを阻はみたかったのか…

(鎌足の顔を見て) 中臣の者にも接するなど言うた、」

鎌足 「過ぎし丁未^{ていび}の戦、中臣が物部に与^{くみ}したからでしょうか…」

山背 「物部か、」

入鹿 「死してなお偉大な太子、いずれ神仏^{かみほとけ}と崇められるのでしょうか。息子としては

辛いものがある。まだ仮普請の屋敷ですが、今宵はごゆるりとなされてください

い。飲もう！」

鎌足 「いいですねえ！」

山背、入鹿、鎌足歌い、舞姫、宙の声加わり、にぎやかな宴となる。

M16

♪ヤマトしうるわし（漕げよマイケル）

入鹿.. ヤマトは国^{くに}のまほろば

はるか ヤマトしうるわし

山背.. 春は桜か 夏みどり

秋 月冴えて 冬の雪

全員.. ヤマトしうるわし

ヤマトしうるわし

祈ろう あしたを

祈ろう あしたを

入鹿.. ^{やまてのおおえ}山背大兄 よい男

いくさ好まず 身をひいた

鎌足.. 飛ぶ鳥を今日か 明日かと

落とす勢い おおいそがし

山背..
言わず語らず 言霊

言葉にすれば 風が吹く

RAP..
山背さん 山のお城 引き籠ってる場合じゃないよ!

民は待ち喚いて皆パニックよ 見て見ぬ振りしてんじゃないの?

豪族どもが搾取して拍手! 逆らおうってんならそりゃ悪手

神様仏様こんなザマな我らヤマト民救って下さいな!

厩戸の太子 分かるか? 俺らの内心

あんたの息子に託した内政 国の繁栄 民の安寧

疫病蔓延 税金取り立て

山背さん! 山背さん! どうかヤマトの未来をお救い下され〜!

入鹿・鎌足.. 平凡な世界 埋もれて

運命の風は どこ吹く

全員..
どこ吹く うるわし

どこ吹く うるわし

M17

ややあって鬼の面をつけた舞人登場。

山背はその舞人の正体を知っている。

あるとき舞人、山背に耳打ちし、舞が終わる。

山背 「あいにくだが迎えが参った。吾はまもなく退出いたそう。」

鎌足 「山背様のお身内に鬼がいたとは、」

鬼が面を外すと秦河勝。以前より髪に白いものが目立つ。

河勝 「秦河勝にございます。ご無礼をいたしました。」

入鹿 「河勝か。噂をすれば。面白い趣向よのう。我が屋敷に鬼のなりで乱入し、客を

さらうとは、」

河勝 「お許くださいませ。」

山背 「河勝は吾の鬼の目なのじゃ。」

鎌足 「鬼の目？」

山背 「要は見張りじゃ、」

笑い声。

山背 「生前、父に命じられたようだ。河勝の一族は夜叉と申して、人の目には見えぬものを見るといふ。それで父よりその鬼の目で吾を護れと。隠居した今も時折、山城国より風に乗らわられる…先年、たむらの田村皇子が帝となった。その際、吾を推挙する氏族、田村皇子を推す者、戦にこそならなかったが朝廷は相当、ふんぎゆう紛糾した。」

入鹿 「そうでしたな、」

山背 「父は亡くなる前、もし吾が帝に推挙され、争いになったときは潔く身を引け、決して戦にしておはならぬと言いついた…で、吾はそのとおりにした。まつりごとを嫌うたわけではない、できれば父の遺志を継ぎこの国をより良くしたい。その願いを察してか、いまだ吾を担ぎ出そうとする向きもある。河勝は、吾がこうして汝と会なれうおているのを知れると、またぞろその機が盛り上がるではないか、そう恐れているのだ。」

入鹿 「それは、取り越し苦労でございましょう。」

山背 「今宵は長年の鬼の目に敬意を表し、斑鳩に帰ることにするよ。」

入鹿 「では、お見送りを。」

山背、去りかけるとき、

山背 「汝も気をつけられよ。この屋敷、あの門構え、帝に対し奉り専横せんおうが過ぎる、

噂されても面倒ぞ。」

入鹿 「ありがたく…が心配は要りません。帝は我ら蘇我なしではお立場を守ることができません。ここだけの話、今の帝はお身体が弱い。まつりごとに興味も示されぬ。吾が取って代わったほうがこの国のため、」

山背 「控えよ、」

入鹿 「はは（控えて）…しかし、吾はまもなく父より大臣の位を譲り受けます。」

山背 「ほう、」

入鹿 「帝の皇后、たからのひめみこ 寶皇女様内々のお取決めですが、」

鎌足 「皇后さまは入鹿様びいきなのでございます。」

入鹿 「（鎌足をたしなめ）控えよ、」

山背 「急がすともよいと思うが、」

入鹿 「吾はかつて太子が目指されたように、ヤマトを隋の国にも負けぬ強い国にした
い、そう思うております。山背様にもぜひお力添えを、」

その言葉には応えず、

山背 「馳走になった。」

山背、河勝ともにも去りかけるところ、再び宴がはじまる。

入鹿の歌。宙の声、和す、

M18

♪ヤマトしうるわし（漕げよマイケル）

入鹿.. ヤマトは国のまほろば

蘇我の世の春 うるわし

全員..

蘇我の世 うるわし

蘇我の世 うるわし

鎌足と河勝が目を合わせる。

Scene 6 斑鳩宮（法隆寺）

山背大兄王出て、歌う。

ややあつて山背の妻、春米女王も歌う。

M19

♪a-ga-na-u

山背.. 永遠はない

限りある命 駆け抜けるだけ

山背・春米.. 永遠はない

夢を風にのせて 生まれ変わるだけ

春米 「眠れないのですか？」

山背 「春米はるしなか、このところ同じ夢をみる。」

春米 「どのような？」

山背 「父が、吾をどこかに誘おうとしている。どこへ行くのかと問い、父の背中を追うのが見うしのうてしまう。」

春米 「父上らしい。言葉少なで、思わせぶり、」

ふたり笑い、

山背 「偉大な父をもつ苦しみ、そなたはともに背負うてくれている。」

春米 「私たちは母は違えど兄いもうと、同じ血を分け合う夫婦にございます…あなた様は一人ではございません。」

山背 「ああ。」

春米 「実はイヤな噂を耳にしました。」

山背 「なんだ、」

春米 「蘇我の新しい大臣が、」

山背 「入鹿か、大臣の位につくのは早いと申したのに、」

春米 「わが上宮王家の民を無理矢理連れ出し、無断で使っているそうで。当家だけではございません。大臣の無礼な振る舞いは多くの豪族に及び、皆さま方の不満は、あなたを旗頭に大臣を失脚させる動きになりつつある、」

次の間で騒ぎの様子。

女官（声）「お待ちください、困ります！」

鎌足（声）「中臣鎌足と申します。山背大兄王に火急のお知らせにございます！」

春米 「なんでしょう？」

山背 「（次の間に）よい、通せ。」

M20a

鎌足が走り込む。

鎌足 「夜分に失礼いたします。急ぎ、蘇我の大臣の動きをご報告いたしたく、」

山背 「なんじゃ、」

鎌足 「あなたが一部豪族と結託し、謀反の動きありと、大臣が軍を率いてこちらに向かっております。」

春米 「そのような事実はありません！ 私たちは何も、」

鎌足 「吾は大臣とは無二の親友でございますが、この暴挙を見過ごすことでまず、急ぎ参った次第です、が道々、これは好機ではないかと思ひ至り、」

山背 「好機？」

鎌足 「大臣を追い落とし、山背大兄王の理想の国をつくる。」

山背 「吾に蘇我と戦せよというか、」

鎌足 「これは戦ではございません。山背様は亡き太子のお血筋。皇后のご威光を盾に、国を私物化する大臣こそ謀反人。山背様はその謀反人を成敗なさるのでございます。」

山背 「入鹿が吾に弓ひくとは思えぬ。まず会おう、会^おうて話し合えば、」

鎌足 「そのまえにお后、お子様が殺されるようなことになれば元も子もない。」

春米 「あなた、」

鎌足 「こういたしました。まずこの斑鳩宮から早々にお逃げください。」

山背 「逃げてどうする？」

鎌足 「軍隊を整えます。人望のある山背様が旗印なれば、はせ参^{あまた}じる豪族数多。民も拍手喝采、」

山背 「待て。河勝はいかがした？」

春米 「今宵に限って、」

鎌足 「お后様、さあ、」

鎌足が山背と春米を伴い退場。

入れ替わり、入鹿登場。

入鹿 「これはどうしたことだ。山背大兄王！」

しばし探すが、

入鹿 「まさか告発のとおり、ご謀反か…」

鎌足出て、

入鹿 「鎌足、なにゆえ、」

鎌足 「噂を聞きつけ、先回りし見張っておりました。山背大兄王はご一族を伴い、急ぎ宮を後にされました。」

入鹿 「いずこへ、」

鎌足 「おそらくはお味方する豪族どもと軍勢整え、戦を仕掛けてまいるかと、」

入鹿 「そんなはずはない。山背様はなにより戦を嫌うておいでだ、まして吾と戦うなど、」

鎌足 「以前、お聞きになったでしょう。亡き太子は蘇我、中臣を警戒しておられた。長年にわたる恨みがある、」

入鹿 「恨みとはなんだ!」

鎌足 「太子は終生、帝の位につくことはなかった。山背様も同様です。それは大臣のおじい様、お父上、歴代の蘇我家の画策によるもの。蘇我さえ滅びれば山背様に帝の座が…そうお考えになっても不思議ではありませんまい。」

入鹿 「ばかな、」

入鹿、逡巡するところ、

鎌足 「お早く山背様をお討ちなさるがよろしゅうございます。かつての物部のようにこの国より、蘇我が抹殺されてよろしいので?」

入鹿 「謀反だ! 山背大兄王を討つべし! 続け!」

入鹿、出撃。

鎌足、その様子をみて笑い、退場。

Scene10 鬼の目

SE 戦の音。

M20b 入れ替わり夜叉たちが追う。夜叉の群舞。

入鹿が戦の構えで通り過ぎていく。

鎌足がゆく。

あるとき夜叉に誘われ、山背と春米出る。
夜叉のなかに河勝。

山背 「河勝か、」

河勝 「留守をいたし、申し訳ございません。」

山背 「どうやら吾ははめられたようじゃ、」

河勝 「そのようでございます。」

山背 「吾より河勝を遠ざけ、なにもかも計画のうち…今ごろ飛鳥宮では吾が帝に対し、
謀反を起こしたと触れ回っているだろう。」

春米 「何者が？ 入鹿が？」

山背 「吾は斑鳩に戻る。」

河勝 「どうなさるおつもりで。」

山背 「父の言葉に従い、吾は戦わぬ。死して潔白を表明する。（夜叉たちに）后や子どもたちを頼む。」

春米 「私もともに参ります！」

山背 「ならぬ！」

春米 「あなたひとり死なせはいたしません！ 気性の激しい入鹿のこと、生き残った子どもたちも無事とは思えません。のちの運命を思えば、ともに、」

山背 「春米…」

山背、春米と行きかけると、

河勝 「お急ぎにならずとも、人は必ず死にまする。」

山背 「策があるというか。」

河勝 「和をもって貴しとなす。」

山背、振り返る。

河勝 「人は生きてこそ、ぶつかり、あらがい、調和することができます。和をもって貴しとなすとは、懸命に生きる者にだけ与えられる至上の喜び、」

すすり泣く夜叉たち。

山背 「あいわかった。亡き父がいのちを懸けたその言葉に、運命を委ねよう。」

山背、春米、一旦退場。

夜叉が駆け抜ける。

入鹿が出る。

再び山背出る。

夜叉を隔て、山背と入鹿の対話。

山背 「振り向くな！」

入鹿 「山背様か、」

山背 「吾は謀反など企ててはいない。」

入鹿 「しかし事は動いてしまいました。山背様の名のもと、いくつかの豪族が決起し、飛鳥に向かい軍勢を差し向けている。こうなればあなたを捕らえ、収拾を図るのみ。」

山背 「汝に捕らえられるつもりはない。」

入鹿 「吾は帝の軍を率いております。手向かいなされば、この手で山背様のお命頂戴せねばなりません！」

山背 「手向かいなどせぬよ、」

♪a-ga-na-u

山背.. 永遠はない
限りある命 駆け抜けるだけ

入鹿.. 永遠はない
夢を風にのせて 生まれ変わるだけ

山背.. 過去を贖う
あがな

山背 「我ら一族もろとも、この世から消える。」

入鹿 「自害なさると？」

山背 「死ぬともいうておらぬ。今より我らは河勝の誘う土地へ旅立つ。そこでは吾は山背大兄王でも誰でもない。運命を替え、人として未来に適うように生きていく。」

入鹿 「それでも追っ手が差し向けられましょう。豪族たちの荒ぶる心を鎮めることはできぬ。」

山背 「それゆえ、斑鳩宮で我ら一族、みな自害して果てたように工作する。」

入鹿 「なんと、」

山背 「単なる偽装ではない。行き倒れで死んだ者、病に倒れた者、そうした遺体を集め火を放ち、父が晩年、過ごした斑鳩宮、法隆寺もろともに盛大に葬ってやるのだ。恵まれぬ者への施しは父の御心にもかなるだろう。世間虚仮、唯仏是

真、」

入鹿 「その言葉、亡き太子の、」

山背 「吾もしばらく忘れておった。河勝より生きよと活を入れられ思い出した。今、目の前にあるものは全て仮の姿に過ぎぬ。形あるものは消えてなくなるが、真実だけは永遠に残る…汝に頼みたいのは、斑鳩宮の焼け跡で見つけられた遺体

を、吾ら上宮王家の者と断じてもらいたい。以降、吾は汝の前から、都から
じょうぐうおうけ
姿を消そう。のちの世の人に、戦わずして死んだ臆病者よと謗られても、吾は
そし
真実の姿で生きていく。」

M21b

山背・春米・入鹿・宙..

過去を贖う

贖うことは手放すこと

贖うことは振り返ること

贖うことは生かすこと

贖うことは許すこと

希望の虹を 渡りながら

入鹿 「承知いたしました！」

全員.. 和をもって 和をもって

和をもって實しとなす

選ばれし者

歌の間に山背たちと入鹿の別れ。

あつという間に山背たちは消える。

残された入鹿に、

河勝 「中臣鎌足に気を許してはなりません。未来、あなたがどのように語り継がれ

るか、決めるのは今です。」

河勝、消える。

入鹿.. 永遠はない

限りある命 駆け抜けるだけ

永遠はない
夢を風にのせて 生まれ変わるだけ

入鹿 「おお、斑鳩宮に火の手が…吾はのちの世に仇と^{かたき}呼ばれようと憎まれようと、

この国を変えてみせる！」

選ばれし者

歌い終わり、入鹿退場。

Scene11 新世界

降るような星空。

山背、河勝が登場する。

山背 「星が…手を伸ばせば届くようじゃ。人生は面白いのう。これからが吾の真実、

この大空の下、吾は芸能の民として生きていく。幼い頃からよう言われたもの

じゃ、人の暮らしを導くのは、まつりごとだけではない、言葉と身体、おのれ

の持てる力すべてを使うて、人に生きる力を伝えることが吾の…そうか、河勝

はこのときのために吾に舞を教え続けていたのか？」

河勝、ひれ伏す。

山背 「父は国の運命を変え、我がいのちを救うてくださったのか…」

出演者、徐々に登場し、大合唱となる。

M22

♪宙の声 フィナーレ

和のこころ 日出る国より 広めんと

生まれし光り 聖徳太子

東雲の明星 この世の闇を 照らせよ

和をもつて 貴しとなす 十七の

おしえは今も よすがとなりぬ

天高く 轟く声で あなたを 讃えよう

天高く 轟く声で あなたを 讃えよう

志しは 天地を覆い 人つくる

よるこび伝う とくしえの花

M23

♪ヤマトしうるわし (漕げよマイケル)

見上げる空は 晴れるち

君のこころも 晴れるち

涙の雨も 晴れるち

明日はきつと 晴れるち

晴ればれ 晴れるち

晴ればれ 晴れるち

お各様はみんな 神さま

感謝します ほんごにありがとう

愛する あなたの 祈ろう あしたを

愛する みんなの 祈ろう あしたを

晴ればれ 晴れるち

晴ればれ 晴れるち

和をもつて 貴しとなす